

## 翻刻 『後撰和歌集』 中山美石書入（二） 卷第一八

—『後撰和歌集新抄』復元のために—

玉田 沙 織

『後撰和歌集新抄』（文化九年（一八一二）序）は、中山美石（一七七五—一八四三）の手になる『後撰和歌集』注釈書である。江戸期に別記一卷と巻第一（第一四）までが刊行され、「注釈史中の白眉」「今なお、総体としては『新抄』を越えていない<sup>①</sup>」と言われる。巻第一五・一六・一九・二〇は佐々木弘綱写中山家藏稿本による翻刻があるが、巻第一七・一八は戦災により焼失したため、両巻の内容は、今や知るべくもない。しかし、そのいくらかを伝える書物が、カリフォルニア大学バークレー校に存する。中山美石の書入を持つ『後撰和歌集』版本である。本稿は、巻第一七を翻刻した前稿<sup>④</sup>に引き続き、該本の巻第一八を翻刻する。書誌は左のとおりである。

版本、上下二冊、刷りは並。縦二六・二糎、横一八・六糎。上下巻ともに原装縹色表紙（褪色）。原題簽左肩無辺。「後撰和歌集 上」・「後撰和歌集 下」。内題「後撰和歌集巻第一（二十）」。丁数上巻九一、下巻一二〇丁。尾題無。刊記無。上巻印記「藤垣内印」（本居大平）・「本居永平」・「本居文庫」二種（本居内遠・豊穎）。下巻印記、前掲「本居文庫」二種。本居文庫分類番号「技 四三〇」。上巻表紙右下に墨書「本居永平」。

詳細については前稿に譲るが、正保版本の後刷りである該本は、余白への書入に加えて夥しい量の付箋を持ち、厚みは本来の三倍にも達する。書入は、先行注釈や同門の学徒の説、これらを踏まえた自説に師匠の本居大平（一七五六—一八三三）の評を伴っている。そして、巻第一冒頭歌に対する、『新抄』版本と書入との内容の比較からは、書入が、完成稿

にあたる版本の内容を、すべてとは言えないまでも、多く有していることが知られる。<sup>(5)</sup> また、書入は、大平の門人指導のあり方や、執筆動機も含めた『新抄』成立の機微をうかがうに足る内容ともなっている。巻第一八は巻第一七とは異なり、参着したことが新たに知られる書物はないが、他巻に同じく諸書を引用し、検討を加えたものである。

なお、凡例九、4、は前稿の翻刻にも適応されるものである。

## 注

- (1) 工藤重矩校注『後撰和歌集』(一九九二年、和泉書院)、解題一六頁。
- (2) 中川恭次郎編『後撰集新抄』(一九一〇〜一二二年、歌書刊行会。のち復刻、一九八八年、風間書房)。
- (3) 藤井隆氏が古書店白元堂より伝え聞かれた話によれば、豊橋市内にて焼失したとのことである。
- (4) 『古代文学研究 第二次』一六、二〇〇七年一〇月。
- (5) 注4論文。

## 凡例

散逸した記述内容を再現すべく、表記や形式を整えた。

一、翻刻は通行の新字体漢字、かな、カナを用い、句読点を補った。

二、各歌冒頭に新編国歌大観番号と底本の正保版本に拠る和歌本文を新たに掲げた。

三、注は詞書・作者・和歌に区別し、小見出しを新たに付した。

四、注が対応する版本本文を新たにゴチック体で掲出した(一首全体に対応する場合は略した)。注が一部分のみに付されている場合は、該当箇所に波傍線を付した。

五、注は書入の纏まりごと（位置・筆色等により区別）に「」に収めた。翻刻順序は記入位置に従った。

六、内容上意味のある改行は「／」で示した。

七、その他の傍注や校訂者による補注は、※を付して各歌注の末尾に掲げた。

八、割注はへゝに収めた。

九、次の各条については表示を割愛した。

1、版本文文に加えられた濁点・仮名遣い注記・振り漢字。

2、各歌に付された他出・異同注記のうち、それ以上の言及のないもの。

3、書入の筆色。

4、カナ拗音・音便等の前後に付された「゛」符号。

一〇、師の本居大平による評語等の書入は□内に示した。

#### 卷第一八・雑歌四

一二五〇 我やとにあひやとりしてすむかはつよるになれはや物はかなしき

・ 詞書 かはつ「△此蛙ハ池ナトニスムかへるナルヘキヲ、此比ヨリハヤクかはつトモイヒ誤タルナルヘシ。蛙ト書タルヲ後ニかはつト写シ誤タルカト思ヘト、六帖ニモかはつノ題ニ出タレハ写誤トハ見エズ」「△印ノ所ヘ考ルニかはつトかへるトハ別物也。シカルヲト云言ヲソヘ玉フベシ」

・ 和歌 「抄、我も夜はさひしく物悲き心より、我に相宿りの蛙も夜になれは物悲きかとよめる也」

一二五一 玉えこくあしかりを舟さしわけてたれを誰とか我はさためん

・ 和歌 「抄、玉江、越前也。芦かり小舟はさし分ての枕詞也。あまた知かたらふ男なれは、誰をたれとさしわけて我



は定めんやうもなしとなるへし。抄ノ説、趣意ハタガハヌサマナレト、云方アカヌ所アルヤウ也。下ノ句ハ詞書ニたのもしき事ナト云ヲウケテ、誰ヲ誰トトリワケテ私ハ定メマシヤウゾ ヤツハリ定マツタ事モ ゴサリマセネハ 何モタノモシイ事モ コサリマセヌといふならんか。○然り」「後拾・雜五、おほかりしとよの宮人さし分てしるき日かけを哀とそ見し。拾・恋一、玉江こくこもかり舟のさしはへてなみまもあらはよらんとそ思ふ」

一二五二 みちのくのをふちのこまも野かふにはあれこそまされなつくものは

・詞書 おとこの「つかね緒、女の心とけさりけるけしきを見て、あやしく思はぬさまなることゝいひけるをとこのけしきも、いかにおもへるさまにか有けむ、女」

・和歌 「抄、尾駁、尾のまだら成也。但八雲抄には、陸奥ノ牧の名云々。のかふは野飼に除をそへて也。おふちの駒も野飼放てはなつかぬ如く、我も君除くゆゑ、なつきかたしと也」「みちのくのをふちのこまも云々、抄云、野飼※1に除くをそへて也云々。／除クヲノカウト云事アルニヤ。オホツカナシ。野飼にはトハ、手馴※2ラサズ放チオク事ニテ、俗ニイハ、オツ※3バナシ放ニシテオイテハト云意ナルヘシ。又抄云、をふちは尾ノまたらなる也。是ハサルヘキ事トハ聞ユレトモ猶歌ノ上ニ用ナキ詞ニテ、陸奥のトツ、ケタルニモ叶ハヌヤウ也。牧ノ名ノ方シカルヘシ。○野飼ニスル事ヲ、ハタラカシテ野かふト云語勢ハメツラシ。少シモ無理ニハアラズ。／○をふち、地名ト見ル方オタカヤ也。尾駁ト云事、外ニ見アタラズ。サレトアルマシキ詞ニモアラズ」

※1 「此説非也」 2 「此説ヨシ」 3 「ヨロシキ解也」

一二五三 いつくとて尋きつらん玉かつら我はむかしのわれならなくに

・詞書 中将「少将、抄本。善朝臣也。寛平五年右少将、右衛門督舒息」 侍けるを…ありて「(点線を付して)此十

三字抄本ニナキハ、非ナルヘシ。○ナクテハワロシ」

・作者 源善朝臣「作者部類云、源善、右衛門督舒子。寛平五右少将、至寛平七年。昌泰三年右中将、延喜元左遷。／

かくては中将にとまられし人と見えたれば、抄本に少将にてトアル方、フト見テハマサルヤウナレト、猶中将トアル方マサルヘシ。此つほやなくひナトオキシト、をき所に云々トハ、同時ノ事ト見ユレハ、是延喜元ノ左遷ノ時ノ事ナルヘシ。サラハ中将ナラン事論ナシ。扱左遷ノ時ノ事ナラント思フヨシハ、詞書ノにはかに事ありて云々、あはれなる事など云々。又歌ノ意モタゞノ事トハ見エサレハ也。○右ノ説スヘテヨシ」

・和歌 「抄<sup>※1</sup>、八雲御抄に玉かつら老懸の事云々。善朝臣いま左遷の身なれば、昔の我ならなくにとよめるなるへし。ノ下ノ句ハ、遠キ国ニ、ソコトモナクサマヨヒ居ルヤウニ云ナシテ、扱今ハ老懸ナトモ用ナキ物ニナリタルニト云意ヲモフクメシニカ。○此説ヨロシ」 「源・玉葛、恋わたる身はそれなれと玉かつらいかなるすちを尋ねきつらん」 「いくとて尋来つらん玉かつら、玉蘊は頭にかくる物。玉葛は蔓の長くはふ物にて長きともたえぬともいふよしの事など、冠辞考にて明か也。されと今の歌ノハ、老懸は頭にかくる物なればやかて玉蘊にいひなして、さてそれを玉葛の意にして尋きつらんトイヘリト見エタリ。もとは二種各別なるを、詞同しければ遣<sup>※2</sup>ひしなるへし。源・蓬生、たゆましきすちと頼みし玉かつら思ひの外にかけはなれぬるナトモおなしさま也」

※1 「ヨシ」 2 「コノ説ヨロシ。○頭ニ懸ル蘊ト地に生ル葛トヲ一ツニシテヨメル也。○大平云、玉かつらヲ歌ニヨムニたつねト云事ヲヨムハ、夏ノ比葛かつらヲ取りニ山ヘ入テ、ソノつるヲ手ニ取テソノ根ノ所マテとめ行事ヨリ云ナルヘシ」

# 一二五四 あさことにみし都路のたえぬれは<sup>ことあや</sup>このあやまりにとふ人もなし

・和歌 「朝ことにハ、朝よひにト云意カ。ことあやまりは言誤にて、俗にイヒソコナヒニモといふ意カ」 「朝ことは、日こと也。源・梅枝、花の香をえならぬ袖にうつしもてことあやまりといもやとかめん」 「あさことに見し都路のたえぬれは云々、訳、是迄毎日<sup>※1</sup>く見馴<sup>※2</sup>タ都ノ其便宜ガ 絶<sup>※2</sup>ハテマシタカヤウナ所ニ居リマスレハ 今テハトント<sup>※3</sup> ケガナ 鹿相ニモ誰モ訪テクレル人ハコサリマセヌ。ノ都路のト云詞ノ釈、猶ヨロシカラヌニヤ。○ヨロシカラス。○つねニ



ヨムハ京へ行道也。コ、ハ御所へユク道ノ事ヲ云也。／○都路ハ宮所路ノ意ヲカネテヨメル也。万葉二ノ卅一丁ニハ

宮道トアリ。毎日ノ参内ノ道也。コノ歌ニテハ、上ノ句、表ノ意ハ左遷ノ身ニテ他国ニ住メハ都路便宜ノ絶タル事ヲ云

テ、実ノ下ノ意ハ、毎朝ノ出勤ノ参内ノ道ヲ云也。出勤スル事モカナハヌ身ノ上ハ 誰アリテ ケガナ間違ニモ音ツレ

ヲスル人ガナイトヨメル也。○自身ノ出勤ノ事ノミニモアラス、人々ノ参内スル事ヲモ、見ル事ノカナハヌサマヲ云ヤ

ウニモキコユ。イヨ／＼アハレ也。○ことあやまりト云事、間違ニモト云事ハ勿論也。下ノ意ハ、自身ノ今ノ身ノ上、

コトヲアヤマリテ不調法ヲオカシテ左遷ノ身トアレル故ニト云事ヲモカネタル也。あやまりト云詞ニヨレル也。 トヒ

コヌハ先キノ人ノ事、トハレヌハ身ノ上ノ事ニテ、あやまりト云事ノカ、ルハ、先ノ方ト自身トノ差別ハアレトモ、コ

ハ、ハ歌ノアヤニ云ナレハ、トチラヘモヒ、カセテキクヘキ也。／ソノ例ハ、源氏きりつほノ卷ノ歌ニ、いかまほしきは

命なりけり、生テ在マホシト行カマホトヲ歌ノアヤニヨメル也ト故翁ノ説也。生マホシトイハ、死テハ行カマホシカ

ラズト云ヘキナレトモ、歌ノ文ニトリナシテ聞クヘキ也。勿論道ト云事ノ縁語ナレハ也」 ことのあやまり「抄、同。

此方ヨロシ」

※1「見し都路の」 2「たえぬれは」 3「ことあやまりに」

一二五五 いっしかとまつちの山のさくら花まちてもよそに聞かかなしさ

・ 詞書 まうてきながら「(七文字を囲い) つかね緒」

・ 和歌 「抄、八雲に、真土山、東国駿河にあり。又、紀伊にも有云々。いっしかとまつといひかけて、まちてもとは

ねはよそにきくと也」「遠方ナ山ノ花ヲ イツカ／＼ト待テ 扱待ツケテ咲テモ ヤツパリ自ラ見モセズヨソノ事ニ聞

テ居ルヤウニ 御帰リヲイツカ／＼ト御待申テ トウ／＼待ツケタノニ 御目ニモカ、ラズ ヤツパリヨソニ聞テ居リ

マスガ 悲シクコサリマスル」 まつちの山「大和」

※1「○コノ説ヨシ」

一二五六 いせわたる川は袖よりなかるれはとふにとはれぬ身はうきぬめり

・和歌 「抄、為家抄、いせとは五十瀬とかけり。五十重、五十日なといふ詞の心也。河しとは、しは、やすめ字也。袖よりなかるとは涙をいへり。我とふに人とはねは、身は涙にうきぬと也。我名をよせたり」「雑四、二ウ、いせわたる川は袖より／奥義抄云、イセトハ五十瀬ト云ナリ。スヘテ五ノ字ヲ、イト云ナリ。万葉ニハ、五百重ト書テイヲヘトヨム。五百代小田ト書テイヲシロヲタトヨメリ」

一二五七 人めたにみえぬ山ちに立雲をたれすみかまのけふりといふらん

・作者 北辺左大臣「源信、嵯峨第一源氏、抄。／拾芥抄云、北辺亭へ土御門北西洞院西、左大臣源信公家」

・和歌 「抄、人目も見えぬ山路の雲を、誰住といひかけてたれ炭竈の煙とはいふらんと也」

一二五八 あすか川ふちせにかはる心とはみなかみしもの人もいふめりなイ

・和歌 「抄、水上下を皆上下の人といひかけて也。心はあきらか也。古今、飛鳥川淵は瀬になる云々。／此歌の事、上恋ノ三ニ委クイヘリ」

一二五九 今こむといひしはかりを命にてまつにけぬへしさくさめのとし

・詞書 人の「つかね緒、むこの今まうでこんといひてまかりけるが、又ふみかよはす人有ときゝて、久しう云々といひつかはしける、をんなの母」 人のむこの「人のむこの云々、あとうかたりの、抄、僻案抄云、あとうかたりとは、なそ※くかたりといふ事歟。拾遺にはなそくたりとかきたり」 申けるといひつかはしける「むすめのいふよしにせし也、抄」

・和歌 「歌、今こんといひしはかりを云々／抄、僻案抄云、さくさめの刀自、諸人一同之説、しう※とめのよし金吾も申ければ、さてこそは。讃岐入道顕綱朝臣説とて、むすめ伊予ノ三位申けるは異説あり。さくさめの年といふは、早蕨早苗の早の字、若草初草マヤの草、未通女ヲトメたをやめの初瀬めなといふめの字。若草めの年にてまつにきえぬへしとよめる



歟。始平懷の事ならは、詞にあとうかたりの心をとりとにかくへしともおほえす。少つねになき事なればや、あとうかたりとはいふへき。愚按、<sup>(A)</sup>顯照袖中抄云、さくさめとは、能因か歌枕にはしうとめを云といへり。八雲御抄、さくさめ、しうとめをいふ也。匡房説之由、俊頼抄にあり。としとは、順和名、頁、謂老女、為頁。刀自二字者訛也。顯昭説、同義。丁年は、或抄、若く盛の心也。又六十老たる心歟云々。然共、僻案ノ御説可用「あとうかたり、瓶丸云、物語ナトノ名ニテモアランカ。古道云、俗の諺ナトノ事ニテハアラシカ。／さくさめのとし、瓶丸<sup>※3</sup>云、あとうかたりと云物ニアル事ナルヘシ。／猶タシカナル御説、故翁ノ御考ナトハアラズヤ。／○大平云、此二ツノ詞イマタ考ズ。故翁ノ説モナシ。瓶・道両説モヨシトモ云ガタシ。旧ク云伝ヘタル事ハステガタシ。サレトしうとめ又早草女ナト云事ハイカ、也。あとうハなそくノ意ナラハ、阿はなぞト云事ヲあどト万ノ東歌ニアレハ、あどがたりニテあとうは音便ニソヘタル事歟。あど語ニテなそくノ事ナルヘシ」

さくさめのとし「丁年、大納言本」「小草女刀自、為家抄」「雜四、三ウ、今こんといひしはかりを／奥義抄云、サクサメ、サマくニ申メリ。江都督ハシウトメノ異名ナリト申シ。サレハ、シウトメノ娘、刀自ニテ有ケルニヤト書リ。刀自ハ女ノスヘタル名ト日本紀ニ見エタリ」

※1「コノ説ハヨロシカルヘク思ハル」

※2「トルニタラヌ事也。此次々ノ説モトニタラズ」

※3「コレハサル

事ナルヘシ。むこノ返歌モヨシアル事ナルヘシ。

かねつきてとちめん事ハ云々トイヘルし、うナトノ類歟。ワカラヌ

事ナルヘシ」

一二六〇 かすならぬ身のみ物うくおもほえてまたるゝまでもなりにける哉

・和歌 「抄、我とくゆくへきを、外よりも文やる人ありときけは、数ならぬ我身はさして思はるへきにもあらねは、身を物うく思ひやすらふほとに、またるゝほとには成しよと也。待るゝ程には久しくとはさりしよと也。／抄ノ意アシクハアラネト、少シ言過タルヤウ也。上ノ句ハ、彼異男アル事ヲ、タシカニハイハズ、カスメタルナルヘシ」

一二六一 ありときく音はの山の郭公なにかくるらんなく声はして



・詞書 つねに「つかね緒、つねにまうてくとて、女のうるさかりて云々」

・和歌 「歌ノ意明也」

一二六二 あしのうらのいときたなくもみゆる哉なみはよりてもあらはさりけり

・詞書 ものにこもりたるに「抄、ものにこもり、仏神などに籠る也」「ものにこもりたるに云々、古道云、ものいみ

にトアリシヲ、いみト云事ヲ写シ落セルニハアラヌカ。ものにこもりたるニテハ聞エザルヤウ也。」○コノ説オモシロシ。

／美石云、ゲニシカリ。仏神などにトアル抄ノ説ハウケカタキヤウ也。サレトモ、源氏玉葛巻、長谷詣ナトノサマニ

ヤ。○コノ事ハサモアルヘキ事也。／正月おこなふトハイカナル事ニカ。抄ニ、修正※1などの義也、トアル修正モシラザ

レハ、ものに云々ト云事モイ／ヨ 解キエズ」 正月をこなひて「正月おこなひて、修正などの義也、或抄義」

・和歌 「恵慶集、池のこほり／波よするあしのうらへも音せぬはいけの氷やとちはてぬらん」 あしのうらの「あし

のうらのいときたなくも、抄云、八雲御抄云、芦の浦、難波也。足の由にはよめれとも芦也。愚案、したうつきたな

けなるをそへていへり。心明也。／八雲ノ御説、過タルヘシ。芦の裏トハ芦ノ葉ノ裏ノ事ト聞ユ。ソヲ芦の裏トノミイ

ハンハ詞ノサマハ少シイカ、ナレト、前恋六に、あしの裏葉※2のうらみつへしなトアルモ思ヒアハスヘクヤ。只、此歌ニ

テ葉文字ナキハイカハ、シ。外ニ例モアランカ。／瓶丸云、芦の末※3ウラ也。浦ニハアラス」

※1 「○大平モシラヌ事也」

2 「コレモ末葉也。面背ノウラノ説ハヒガ事」

3 「コレヨロシ」

一二六三 人心たとへてみればしら露のきゆるまもなをひさしかりけり

・和歌 「新勅・恋二、女を見てつかはしける、謙徳公、たとふれば露も久しき世中にいとかく物を思はすもかな、返

し、とはりあけの女王、あくるまも久してふなる露のよはかりにも人をしらしと思ふ。／後拾・恋四、和泉式部、

白つゆも夢も此世もまほろしもたとへていはゝ久しかりけり」「人心たとへて見れば／抄、人の心のうつりやすきにた

とへは、白露も猶久しと也。

○コノマ、ニテヨク聞エタル事也。

／此歌ヨク聞エテ、抄ノ説モヨクアタレリ。サレト、

初二ノ句ノウチニ詞タラヌコ、チス。カ、ル例モアルニヤ。○例ヲタツヌルマデノ事ニモアラジ」

一二六四 よの中といひつるものかかけるふのあるかなきかのほとにそ有ける

・和歌 「雑二、十二才、あはれともうしともいはしかけるふのあるかなきかにけぬる世なれば」「よの中といひつるものか／○スヘテ一首不ト、ノヒノ歌ナレハ、解注シカタシ。／抄、世のはかなき事ともを思ひつゝけて世の中といふ物は是か扱もかけろふのあるかなきかのほとと事哉と也。／<sup>※1</sup>二ノ句ノつるノ詞、少シ心得カタシ。アルカナキカノサ

ホドチャワイ 是ダテ世中ト云タ物テアロウト云意ニヤ。／<sup>※2</sup>又是ガ世ノ中ト云物チャガト云意ニヤ。／此方ニテハ、<sup>※3</sup>つるノ詞用ナキヤウ也。○<sup>※4</sup>つるぬるナトヲ後撰ニハ過去ナラズ既去ニモツカフ事、例アリ。既ニモイヘリ」

※ 太平、1・3から線を引き4に結ぶ。美石、2・3を結ぶ。

一二六五 かくはかり別のやすきよの中につねとたのめる我そはかなき

・和歌 「抄、彼友達の女の、男に捨られたるを、同じ心になきて其女の心になりて、我そはかなきとよめり。心はあきらか也」「恋二、かくはかり常なき世とは知なから人をはるかに何頼みけん」

一二六六 ちりにたつわかなきよめん百敷の人の心をまくらともかな

・和歌 「抄、塵の如く立心也。為家抄云、枕とも哉とは、枕は物を知物也。或抄云、枕は物を知といへは、我名を立る内裏の人達の心を枕にせは、我何事もなき事を知んにと也。知といへは枕たにせて云々」「古・恋四、平貞文、枕より又しる人もなき恋を涙せきあへすもらしつる哉。いせ、しるといへは枕たにせてねし物をちりならぬ名の空にたつらん。古・恋一、我恋は人しるらめやしきたへの涙のみこそしらはしるらめ」「初句ヲ、ち草にたつト云異アル異本アレトモ、枕ト云ヒ清メント云ヒ、ちりノ方ヨロシキ也」

一二六七 うき事を忍ぶるあめのしたにして我ぬれきぬはほせとかはかす

・和歌 「抄、万事<sup>※1</sup>うき事を忍ぶへき天下なれば、ぬれ衣もかはかさんよしなしと也。雨とそへて沾衣とよめり。抄ノ



説イヒ方ワロシ。天の下ハ世中ト云意ナルヲ、忍ふるトイヒ、下ニ沾衣ト云タル縁ト仕立トニテ、天の下トハイヘル也。

○コノ説ヨロシ。／訳、憂イ事カアツテモ 堪忍シテ居ル 世ノ中チャデ ワシガ浮名ヲ清メウト思フテモ トウモ思フマ、ニハ 清メラレヌデヤ」「ウキ事ヲコラヘテ居ネバナラヌ世ノ中デヤニヨツテ：」

※1「イヒカタワロシ」

一二六八 あふことのかたみの声のたかけれはわかなくねとも人はきかなん

・和歌 「抄、逢事のかたきとそへて、形見の琴のと也。此隣の人に懸想して、かりし琴をも形見と読て返す次手に言よる也。／カタミノ声トハ、今返ス琴ヲカナタニテ調フル時ノ調子ノ事カ。○サル事ナルヘシ」 たかけれは「から。

／家集からはノ方ナラテハト、ノハズヤ。○此説ヨロシ」

一二六九 涙のみしる身のうさもかたるへくなく心をまくらともかな

・和歌 「涙のみ云々は、家集の如く、上の塵にたつ云々の返しと見る方、大にまさるへし。さらては聞えかたき所々あり。△コノ説ヨロシ。サレト又別ツノ事トシテモヨカルヘシ。扱一首ノ意ハ、伊勢に心ヲカケテアレト、シラスヘキ

ヨシナキヲナケク意カ。又、只我身ノ憂キ事アルヲ語リアハスヘキ人モナク、ナケキテノミアレハノ意カ」「いせ集、さきのちりにたつの次に返しとあり」「抄、身のうきと思ふ時は涙こほるれば、涙はうさを知物なり。我外、我か歎く心を哀知人のしるよしも哉といはんとて、枕とも哉と也」「ちりにたつノ返しト云説ヨロシ。一首、トカクマキラハシ

クテ解ガタシ」

一二七〇 あひにあひて物思ふころのわか袖にやとる月さへぬるゝかほなる

・和歌 「○キコエタリ」

一二七一 あはれてふことにしるしはなけれどもいはてはえこそあらぬ物なれ

・和歌 「あゝはれといひて、歎きたりとて其かひはなけれども、感すへき事にふれてはたえかたくて、しか歎息<sup>ナケ</sup>かて

はえあらぬものそと也。玉の小櫛に見えたり」○キコエタリ」

一二七二 うつろはぬなになかれたる河竹のいつれのよにか秋をしるへき

・詞書 女ともたちの「つかね緒、をんな友たちのつねにいひかはしけるが、久しく云々、いひし言の葉はといふふることをいひ遣したりければ、竹の葉にかきつけておこせける」 あた人のおもふといひし言のは「抄、此古こと、追て可考」 おもふと「心と。抄本誤ナルヘシ」

・和歌 「和名抄云、箬竹〈加波多計〉」「抄、名になかれたる河とそへて也。竹の葉は色かへぬ心也。我心のかはらぬに比してよめり」「恋五、又雑四、ふかく思ひそめつといひし言の葉はいつか秋風吹てちりぬる」

※1 次の一二七三番歌に対する注。

一二七三 ふかき思ひそめつといひし言のは、いつか秋風吹てちりぬる

・和歌 「重出」

一二七四 心なき身は草葉ホにもあらなくに秋くる風にうたかはるらん

・和歌 「重出」

一二七五 身のうきをしれははしたに成ぬへみ思シへはむねのこかれのみする

・和歌 「抄、正義云、はしたハ半といふ心也。たとへは、昇進もせず沈にもはてねは、苦しく思ひ捨てたき心なるへし云々。竹取物語云、みこはたつもはした、居るもはしたにて居給へり云々。／古道釈、賤ツキ身ノホドヲシリテ 思ヒトマラントスレバ アマリクチヲシイ事ニ ナリヌヘサニ 又思ヘハヒタスラムネガ コガレテクルシイとニヤ。恋ノ歌ナルヘシ」

一二七六 雲ちをもしらぬ我さへもろ声にけふばかりとそ鳴かへりぬる

・和歌 「抄、此歌、故郷に帰るとて人に別をしむにや。けふばかりを雁にそへて、雲路をもしらぬ我さへ、雁と諸声



にと也。○抄ノ説ヨロシ。／此歌モ家集ノ如く、帰雁ノ声を聞テ世ヲ思ヒウンシタル意ヲヨメルナランカ」「雲路をも

しらぬ我さへもろこゑに云々、けふはかりとそハ俗ニ云、今日ハケフギリ、アスハアスギリなといふ事あり。其意なる  
へし。○此意アラン歟。イカ、アラン、慥ニハ定メカタシ」 けふはかりとそ「雜一、初」

一二七七 またきから思ひこき色にそめんとやわかむらさきのねをたつぬらん

・和歌 「抄、此歌は思ふ人の少きより<sup>オサナキ</sup>ふかく頼めて、其の親はらからまで懇に尋ねとふ人を悦ひて、其の親などのよめるにや。○抄ノ説ヨロシ」

一二七八 みえもせぬふかき心をかたりては人にかちぬとおもふものは

・和歌 「見えもせぬふかき心をかたりては云々、抄云、口にて斗心ふかき由かたりて、人よりは思ひまされりと思へるは如何と也。其心の実も不実も見えされはと也。／此歌、家集にも詞書なければ、いかなるよしともしりかたし。試にいはい、男ナトノさし向ひて、オノレノミ心深キヨシヲ イフヲリナトノ歌ニモアランカ。○此朱説<sup>※1</sup>ノ如シ」

※1「此歌、家集にも：アランカ」を指す。

一二七九 いせのうみに年へてすみあまなれとかゝるみるめはかつかさりしを

・詞書 亭子院に「つかね緒云、一本に、いせか亭子院にとあるはわろし」 御ときのおろし「抄、御ときのおろし、御時服のおろしにや。正義云、御ときおろし、御衣の古きを給ふ也云々」

・和歌 「赤染集云、大將殿にむすめのさふらひし時、あまにとてめをたまはらせたりしにわたつみのとしふるあまの身なれともかゝるうれしきめは見さりけり」「抄、伊勢の父継蔭、伊勢守にて任国にありし程、伊勢もそひるたりし心にや。みるめをかつくに御服をそへてよめり」「いせの海に年へてすみ<sup>※1</sup>云々、上ノ句ハ抄ノ説ノ如クナランカ。又ハタ、あまなれとみるめはナト云仕立ニ云タルニカ。伊勢<sup>※2</sup>ガ自ラノ名ヲカケシカ。○抄ノ説大カタヨロシ。御時服ト云

事、今一ツ証拠アラマホシ」

※1「父ト同シク伊勢二年経タリヤ、年経ザリシヤ、ソハシレヌ事也。年経ステモ、カクヨムニサマタゲナシ」

2

「勿論也」

一二八〇 足曳の山のやま<sup>トリ</sup>とりかひもなし峯の白雲立しよらねは

・ 詞書 あはた「抄、あはたの家、今粟田口といふわたりにや。拾芥には神楽岡云々。前注」

・ 和歌 「山のやとりかなふへき歟」「抄、心は明也。峯の白雲は立しよらねはといはんとて也。人も立よらねは、山莊のかひなき心也」「足曳の山のやまとり云々、二ノ句、イ・抄ナトニ、山のやとりのトアル方シカルヘキカ。又本集ノニテ見レハ、山の山守トモアリシヲ、毛<sup>モ</sup>文字をとニ写誤タルニモアランカ。イツレニモ、上ノ句ノ意ハ、山居ノカヒモナシといふ意ト聞ユレハ、山守トスレハ、ソレニテモ聞シカ。○一本ニアレハ、山のやとりの…ノ方宜シカルヘシ」

一二八一 我ならぬ草はも物はおもひけりそてより外にをける白露

・ 作者 ふちはらのたゝくに「抄、忠国、齋院次官、伊予守連永子」

・ 和歌 「抄、我のみ物思ひて袖に露おくかと思へは、草葉も露にぬれしは、物を思ふにこそと也。キコエタリ」

一二八二 人心あらしの風のさむければこのめもみえす枝<sup>キ</sup>そしほる、

・ 和歌 「抄、人の心のすけなきに、涙に目も霧ふたかり思ひしほるゝを、寒風をいためる梢にそへてよめり」「上雜三、十オ、身にさむくあらぬ物からわひしきは人の心の嵐也けり」○人心あらし…、人ノ心ノ荒<sup>ア</sup>テ寄付ヌヲモフクメタル也。寄付ヌ故に、目モ涙ニクモリテ、打シヨレテ居ルト也」 しほる、を。／を歟」

一二八三 うきなから人を忘んことかたみわか心こそかはらさりけれ

・ 詞書 こと人を「つかね緒、こと人をあひかたらふときく人の許に、つかはしける」

・ 和歌 「外心ノ御出来ナサツタト云事ヲ 承レハ サリトハ憂イ御方ヂヤト 存シマスケレド サスガニ ソウ云御方ヲモ 忘レテシマウ事ハ致シガタサニサ ワタシガ心ハ ヤツパリ前々ノ通りニ カハリマセンワイノ」○ウイ人



ヂヤトハ思ウテモ ソノウキ人ヲ忘レテシマハウト思ウテモ ドウモワスレラレヌ スリヤ ワカ心バカリハ一向心  
ガハリガセ セヌト云物ヂヤワイ」

一二八四 うたゝねのここにとまれる白玉は君かをきつる露にやあるらん

・ 詞書 ある法師の「つかね緒、あるほうしのまてきて、すゝのすかりを云々、源ひとしの朝臣」 すゝのすかりを

「縫、スカル、記子也。俗に弟子といふ」「抄、ずゝのすかり、為家、ずゝのてし也。師、念珠のさうそく也。／今モす  
かりハ念珠の総ノ所ニ附テアル玉ニテ、数取ナトイフメル物ノ事ニヤ」

・ 和歌 君かをきつる「抄、おきつるは起つるにそへてなるへし。心は明也」「○上ニうたゝねの床トイヘルニ付テ、  
おきつる…ハ僧ノ起タル事ヲカネタル也。置ノ意ニアラズ」

※1 「露ノ縁ノ言ハ勿論也」「ネテ居タル人ノ起ツル也」

一二八五 かひもなき草の枕にをく露のなに、消なておちとまるらん

・ 和歌 「抄、すかりの玉を露に比して、何にきえすしておちとまりしそと也。彼法師の歌なるへし」「初ノ句ハ何ノ  
ヨシニカ」「かひもなき草の枕に云々、古道云、ワヅカ此娑婆ハ カヒモナキ草ノ枕ノ カリノ世ナルニ ナセニキエ  
ナデ露ノオチトマリケンとにや。法師のうたなれば、無常ヲ観してヨメルナルヘシ。○此説ノ如シ。／今一説ハ、草

ノ枕ナト、云ニ付テ思ヘハ、おち…ハ、遍昭ノ馬より…われおちにきと人にかたるなノおちニテ、ダラクノ事ヲ奥ニフ  
クメルニハアラジカ」

※1 「カリソメノ意也」 2 「実ノ事ニテハナク、歌ノ一奥ニ思ヒヨセタル也」

一二八六 思ひやるかたもしられするしきは心まとひのつねにや有らん

・ 和歌 「抄、何と心のやる方もなくくるしきは、心のまとふ時の、よのつねならんと也」「古今、思ひやれとも行方  
もなしノ思ひやるナトノ如ク、心ヲハルカシヤラントシテモ、心ユカヌ意也」「○思ひやる…／大平云、詞よくとゝの

ひてよき歌也。秀歌と云ニハアラス、趣意詞から打あひてヨキ也」

一二八七 す、虫におとらぬ音こそなけれ昔のあきを思ひやりつ、

・詞書 むらこの内侍「抄、むらこの内侍、或本に灌子とかたはらにかけり。又或抄にはむしこの内侍と有て、虫は名、御は賞翫の詞云々」

・和歌 「解をまたし」

一二八八 夕暮のさひしき物はあさ顔の花をたのめる宿にそ有ける

・和歌 「抄、朝かほはあしたのほとはかりなれば、是をたのみては夕にさひしきと也。一人のみ有て伴ふ物もなき事をいはんとて也。○歌ハ解ケきらす。抄ノ説ノイヒサマ、少シワロシ」「雜四、七ウ、夕暮のさひしき物は朝かほの／

万・十、朝かほは朝露おひてさくといへと夕かけにこそ咲まさりけれ／此引歌コ、ニハヨクモ不叶ヤ。○不叶。カヘリ

テサマタケトナル」

一二八九 は、そ山みねのあらしの風をいたみふる言のはをかきそあつむる

・和歌 「抄、序歌也。峯の嵐のいたく吹て落葉をかきあつむる事をそへて、古き詞をかき集参らすと也。柞山は山城也」

一二九〇 世中をいとひてあまのすむかたもうきめのみこそみえわたりけれ

・和歌 「抄、うき世を厭離して尼となりてすむ所にも、猶憂目は有と也。海士の住所には、浮たる和布ある事にそへてよめり」「これは尼になりて後よめる歌と見ゆ」「うきめヲ、抄ニ浮たる和布トイヘルハ、過タルヘシ。タ、和布ノ言ヲモテ仕立タルナルヘシ。○抄ワロシ。此説ノ如シ」

一二九一 山川のをとにのみきく百しきを身をはやなからみるよしもかな

・詞書 内に「禁中也」



・和歌 「抄、今は里にのみ住て音にのみきく禁中を、むかしの身なからにて見まほしきと也。身をはやなからは、河の水尾の早きに、我身を早くの世のまゝにての心を添たり」

一二九二 よの中はいかにやいかに風のおとを聞にもいまはものやかなしき

・詞書 人に「つかね緒、人にわすられたりと聞て、いせか許に遣しける」

・和歌 「よの中はいかにやいかに風の音を云々、世ノ中ト云物ヲハ トウ思シメシマスルゾ マア ドウデコサリマスル 風ノ音ヲ 御聞ナサルニモ 此比ハ物悲ク思シメシマスルカ。一首ノ意、人ニ見捨ラレテ物思ヒヲスル人ハ、ド

ウヂヤイナドウヂヤイナ 風ノ音 虫の音ニつけても物のみかなしくナトイヘル如ク、何ニ付ケテモアハレヲモヨホシ

テ御気分ガアシウ御坐リマスデアラウナア」 「よの中はいかにやいかに云々、瓶丸云、此歌にては男女の間をいふ世の

中表にて、世間ノ義裏也。古道云、猶世間ノ義、表なるへし。／瓶丸解、カノムツマシク オ契ナサレタ中ハ ドウ

デゴザリマスゾ ソレトナイ 風ノ音ヲオキ、ナサレテモ 此ゴロハモノカナシイ事ガ ゴザリマシヤウガ コレド

ウデゴザリマスル」

※1 「コ歌、アマリ委ク解スルニハ及フマジキ也。いかにやいかに、ドウチヤイナクト云事也」 2 「人にわすら

れ云々トアレハ、世ノ中ハ恋ノ方ニカ、ル也」 「○大平云、人にわすられて物思ひヲスル事ヲ、世ノ中ト云也」 3

「然りく」 4 「コノ解ニハオヨハシ」 5 「非也」 6 「雑ノ歌ニアルハ、恋ノ歌ニハアラス。恋ノ事ヲウハ

サニイヘル也」

一二九三 世中はいさともいさや風の音はあきに秋そふ心ちこそすれ

・和歌 「抄、世の人の事はしらす、我は秋の上に秋のそひたるやうに悲しきと也」 「世中はいさともいさや、抄ノ義ナレハ、いさハ不知ノ意也。今思フニハ、俗言ニイヤモウといふ意ならんか。訳、世ノ中ト申スハ イヤモウ頼ミニナラヌ憂イ物ト申モマダナ事 イヤモウ難儀ナ物デゴザリマス 此比ハソヨクト吹マスル風ノ音モ 秋風ノ上へ秋風ガ

添フヤウナコ、チガ致シテ 悲シイト申モオロカナ事テゴザリマス」『雜四、八オ、世中はいさともいさや、いせ集云、  
 ともたちなりける人の思ふ事有けるをとふらふとて、いへりける。／あくあれば、ある女の歌也。此ことかき、いつれ  
 にも聞ゆ』「世中はいさともいさや云々、瓶丸云、此歌ニテハ世間ノ義表にて男女の間ハ裏也。／解、世間ノ事ハ  
 ウデゴザルカ一向存ジマセヌガ 私ノ身ニハ 此風ノ音ハ モノガナシイ秋ノ上ニ 又秋ガ添ヤウナ心チガサ セラレ  
 マスルワイ。／○人にわすられて物思ヒヲスル人ハ、イヤモウく、モトヨリ秋風ハ物悲シイ物デヤガ ワタシカ身ニ

ハ 秋風ニ 倍カケテ世間ノ人ヨリ一倍物悲イ心地カイタシマス。○カケ歌にいかにやくト云ヲ受テ、いさともいさ  
 や秋に秋そふト云詞カ和歌ニナル也」

※1「いさともいさや」

一二九四 たとへくる露とひとしき身にしあれば我思ひにも消んとやす

・和歌 「抄、露に身をむかしよりたとふれば、たとへくると也。露にひとしきといふより、わか思ひにもきえんとや  
 すると也。／たとへくる、少シイカ、ハシキ詞也。昔カラタトへ来ルト云事カ。○コノ意也」下ノ句、思ヒニ日ヲカ  
 ケシカ。ソレマテモナク、消ント云ノミカ」

一二九五 さゝかにの空にすかけるとよりも心ほそしやたえぬと思へは

・和歌 「抄、中絶たりと思へは、蜘蛛の糸より心ほそしと也。○コノ意也」「すかける小くるとアルヘキ詞也。けるト  
 去テ小俗言の様也。写誤キヤ」

一二九六 風ふけはたえぬとみゆるくものいも又かきつかてやむとやはきく

・和歌 「新千・恋四、風ふけはさこそはたゆれたゆれとも又かきつけつさゝかにの糸」「抄、風に絶たりと見ゆる蜘蛛  
 のいも又かきつくなれば、我中も絶果ましきと也。○コノ如シ」

一二九七 なにたて、伏見の里といふことはもみちをとこにしけは也けり



・和歌 「抄、伏見をふす事に用ひて、床に紅葉をしけはと也。比<sup>レ</sup>袞敷。

○紅葉ト云ニ、錦ノ意アル歟。羈旅ノ部、

亭子院御製草枕ノ歌、考合スヘシ」 「伏見ト云ハ、伏ナカラ紅葉ヲ見ルカラチャワイナと也」

一二九八 我もおもふ人も忘るなありそ海のうら吹風のやむ時もなく

・作者 ひとしきこのみこ「抄、均子内親王、寛平皇女」

・和歌 「万・四、われも思ふ人も忘るなおほなわに浦ふく風のやむ時なかれ、万・四」「抄、風の吹やまぬやうに、たかひに思ひて忘ましきと也」

一二九九 足曳の山下とよみなく鳥も我ことたえす物おもふらめや

・和歌 「古今、足引の山下とよみ鳴鹿に我おとらめやひとりぬる夜は。秋はきにうらひれをれは足引の山下とよみ鹿ぞ鳴なる」「抄、山下ひゝきて鳴鳥も我如くつねに物思ふらんや、さはあらしと也」

一三〇〇 いまはとて秋はてられし身なれともきり立人をえやは忘る、

・和歌 「抄、こと人に思ひかへられし故、あき果られし身と秋をそへてよめり。霧立人とは、八雲御抄に、へたてたる人をいふ云々。かくいまはとあき果られても、其我を隔てし人をえ我は忘れすと也。秋果られしといふより、霧立人とよめり。霧たち人ト云事、八雲ノ御説モ、ヨクモアタラヌサマ也。イカ、」「万・十一、古衣打捨人は秋風の立くる時にこふといふ物ぞ」

一三〇一 思ひ出てきつるもしるくもみちはの色はむかしにかはらさりけり

・和歌 「抄、しるくは、いちしるく也。思ひ出て来たるしるしいちしるく、紅葉はむかしにかはらすと也。色は昔にかはらすといふに、所こそ昔のやうにもなけれとふくめたる也。ケニ、色はノは文字ニハ意アルヤウニモ思ハル。抄ノ説ノ如クナランカ。又ハ、我身ノフリタル事ヲ含メタルニカ。モシハ、人にはつけよ海人のつり舟ノ如クは文字ニ意ハナカランカ。／○イツレトモ定カタシ。兼輔ノ様子ハ昔ニカハレトモ、紅葉ハト云意ニテモアルヘシ」

一三〇二 峯たかみ行てもみへきもみちはをわかなからもかさしつる哉

・詞書 十月はかり「つかね緒、十月はかり、むかしおもしろかりし所なりければ、北山のほとりにこれかれあそひ侍けるついでに」

・和歌 「初二ノ句、心得かたし。下ノ句ハ今居ル北山ノ事ト聞ユレハ、上ハ他所ノ事ニヤ」「思フニ、是則主ハ山莊ナトアリテ北山ニ居タルニハアラヌカ。サテハ下ノ句殊ニヨク聞エ△」「△上ノ句モ、我モ他所ニ居バ来テモ見ルヘキト云意ナランカ」「行らんヲ来らんトモイヘハ、来てもト云ヘキヲ行てもトモ云ヘク覺ユ」「峯高み行ても見へき云々、美石云、作者<sup>※1</sup>北山ニ居タルナラン。扱表ハ紅葉にて、裏には兼輔朝臣に訪はれしよろこひをいへるやう也。○右ノ説ヨロシ。／但、カクハ云モノ、作者ノ北山ニ居ラレシト云事<sup>※2</sup>ヨリ所ナク、又シカ見テハ束緒<sup>※3</sup>モ用ナクナレハ、誤ナルニヤ。／瓶丸云、行<sup>※4</sup>ヲ来トモ云ヘケレド、此歌ニテハサハ心得カタシ。ヤハリ兼輔朝臣ト同時ニ遊ヒシ時ノ歌トシテ、人ノ手折テ来タルナドヲ挿頭ナドシテ、ヨメルナルヘシ。／又云、コノ兼輔朝臣ノ歌賞<sup>※5</sup>テヨメルニハアラサランカ。但此説ハアマリ臆説ナルヘシ」

※1 「コノ如クナルヘシ」 2 「ヨリ所ハナクテモ、マヅ歌ノコ、ロ、シカ聞ユル也」 3 「同シ事也。美説ノ如

クニテモ束ノ詞書ニテヨロシ」 4 「コノ事、イカヤウニテモサマタゲナシ」 5 「論ズヘキ事ナラズ」 6 「ア

マリウガチ過也」

一三〇三 まつ人はきぬときけともあら玉のとしのみこゆるあふさかのせき

・詞書 もとより京に「(ハ文字を囲い) つかね緒」

・和歌 「恋六、終、新玉の年はけふあすこえぬへしあふ坂山を我やおくれん」「抄、待人は東よりきぬるときけともきたりはせて、としのみ逢坂をこえきたりしと也」

「五十四首／雑四卷合式百廿九首」



付記

末筆ながら、貴重な資料の閲覧・調査と翻刻の許可を賜りましたカリフォルニア大学バークレイ校東アジア図書館に厚く御礼申し上げます。

（たまだ さおり／日本文学）